



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「日本挽歌」論：「心そむきて」を中心に
Author(s)	原田, 直保美
Citation	国語国文研究, 124, 31-46
Issue Date	2003-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93710
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_124_31-46.pdf



「日本挽歌」論——「心そむきて」を中心に——

原 田 直保美

はじめに

蓋聞 四生起滅 方夢皆空 三界漂流 喩環不息 所以維摩大
士在于方丈 有懷染疾之患 釈迦能仁坐於双林 無免泥洹之苦
故知 二聖至極 不能弘力負之尋至 三千世界 誰能逃黑闇之
搜来 二鼠競走 而度目之鳥旦飛 四蛇爭侵 而過隙之駒夕走
嗟乎痛哉 紅顏共三從長逝 素質与四德永滅 何因「偕老違
於要期」独飛生於半路 蘭室屏風徒張 断腸之哀弥痛 枕頭
明鏡空懸 染筠之淚遼落 泉門一掩 無由再見 嗚呼哀哉
愛河波浪已先滅 苦海煩惱亦無結 從來厭離此穢土 本願託生
彼淨刹
日本挽歌一首
大君の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国に 泣く子なす 慕
ひ来まして 息だにも いまだ休めず 年月も いまだあらね

ば 心ゆも 思はぬ間に うちなびき 臥やしぬれ 言はむす
べ せむすべ知らに 石木をも 問ひ放け知らず 家ならば
かたちはあらむを 恨めしき 妹の命の 我をばも いかんせ
よとか には鳥の 二人並び居 語らひし 心そむきて 家離
ります へ伊弊那良婆 迦多知波阿良牟乎 宇良壳斯企 伊毛
乃美許等能 阿礼乎婆母 伊可尔世与等可 尔保鳥能 布多利
那良毗為 加多良比斯 許リ呂曾牟企豆 伊弊社可利伊摩須
(卷五・七九四)
反歌
家に行きて いかにか我がせむ 枕づく つま屋さぶしく 思
ほゆべしも (卷五・七九五)
はしきよし かくのみからに 慕ひ来し 妹が心の すべもす
べなさ (卷五・七九六)
悔しかも かく知らませば あをによし 国内ことごと 見せ
ましものを (卷五・七九七)

妹が見し 棟の花は 散りぬべし 我が泣く涙 いまだ干なく
に(巻五・七九八)

大野山 霧立ち渡る 我が嘆く おきその風に 霧立ち渡る
(巻五・七九九)

神龜五年七月廿一日 筑前国守山上憶良上

右にあげた『万葉集』巻五所収、山上憶良作の「日本挽歌」についての先行研究は、誰の妻に対しての挽歌であるかということが主な議論の対象になってきた。山上憶良自身の妻に対してのものか、大伴旅人の妻に対してのものであるかということを、前置された漢詩文や、歌の表現、あるいは、左注の日付から推測しようというものであった。鉄野昌弘氏はその「所以」を「日本挽歌」という異例の題詞を持ち、「誰の死に際して作られたか、といった具体的作歌事情の説明を欠いている」からだとしている。これまでの事実認定の議論はあくまでも歌の表現を事実と結びつけて考えるものであり限界があると思われる。

一方、大浜厳比古氏は「日本挽歌」を「創作としての挽歌」と捉え、伊藤博氏は「亡妻哀悼」をテーマとする「詠物詩」であると主張している。本稿においても「日本挽歌」を創作作品と捉えて、その背後の事実の認定には論点を向けず、作品の表現自体に着目していきたい。なお、夫から見た妻の死を主題とする歌について本稿では「亡妻挽歌」という言葉を使用する。また、「日本挽歌」の長歌の表現を中心に論を進めるため、以下長歌、七九四番を当該歌と呼ぶ。

一

「日本挽歌」は、憶良の本格的な作家活動の最初の作品と見られているものであるが、そこにはすでにいくつかの独自の表現形式が見られる。

例えば、「日本挽歌」の前に、無題の漢詩文が前置されている(以下「前置漢詩文」と呼ぶ。)こともその一つである。この前置漢詩文については、既に多くの先行研究が、漢籍との関連を指摘している。また、同じく形式面からみると、反歌が五首も付けられていることも独自の表現方法といえる。ところが、長歌最終部分の、夫の悲しみが集約された傍線部分(以下この部分を「主情部分」と呼ぶ。)については、先行する挽歌作品の表現を踏襲しているとする説がほとんどであった。早く、『万葉代匠記(初稿本)』が、「には鳥の二人並び居」という表現と、『日本書紀』巻第二十五、孝德天皇(大化五年三月)の歌謡との類似を指摘している。以後の研究においてもこの指摘は支持されている。五味保義氏や、青木生子氏はそれに加えて、人麻呂の「泣血哀慟歌」との類似を指摘した。さらに、村山出氏は「日本挽歌」を前置漢詩文と比較すると、当該歌の主情部分には「孝徳紀」歌謡や、人麻呂の挽歌等の「伝統的挽歌の発想への意識」が窺えると述べている。また、岡内弘子氏は、枕詞「には鳥の」について、憶良以前に「ふたり」に冠される例を見出せないことを指摘しているが、発想の源は従来どおり『孝徳紀』歌謡にあるとしている。

一方で『日本古典集成万葉集』は、「ウラメシキ以下、亡妻に対するこの挽歌独特のくどき文句」と具体的な言及はないものの、主情部分の独創性を認めている。この指摘のように、主情部分の発想の全てを先行する挽歌作品に由来するものと結論付けてしまうのは、従来の研究では語句の分析が不十分ではないかと思われる。

以下では特に、『万葉集』中唯一の表現でありながら、先行研究において詳しい解釈が見られなかった「心そむきて」という表現に着目し、それを用いることによって「亡妻挽歌」という主題にどのような新しい視点が導入されたのか考察していきたい。

二

まずは、従来類似が指摘されてきた作品の表現と、当該歌の表現とを比較する。『万葉代匠記』（初稿本）以来、その類似が指摘されている『日本書紀』巻第二十五、孝徳天皇（大化五年三月）の歌謡について、検討してみる。

○山川に 鴛鴦二つ居て 偶ひよく 偶へる妹を 誰か率にけむ
〈多例柯威爾鷄武〉（一一三）

これは、中大兄皇子の妻が亡くなった際に、野中川原史満が献呈した歌であり、確かに、「鴛鴦二つ居て偶ひよく偶へる妹を」と、水鳥の雌雄並んでいる様子を夫婦の仲に喩えた表現は、当該歌の「にほ鳥の二人並び居」という表現と類似しているといえるであろう。しかしながら、異なる点として見逃してならないのは、『孝徳紀』歌謡では「誰か率にけむ」と、何者かが「妹」を奪っていった

しまったかのように詠まれていることである。

また、青木生子氏は当該歌の主情部分と、「死の確認による喪失感情を濃くしている」という点で、人麻呂の「泣血哀慟歌」二一〇番の「うつせみと思ひし妹が玉かぎるほのかにだにも見えなく思へば」という結びの部分が、「相通じ」と主張している¹⁰。しかしながら同じ「喪失感情」であっても「見えなく」と表現される「妹」と、「心そむきて家離ります」という主體的な行動によって、夫から離れてしまったかのように表現されている「妹」では、夫が感じる「喪失感情」は異質なものと解釈すべきではないだろうか。

次に、村山出氏が当該歌の「我をばもいかにせよとか」との類似を指摘した¹¹。「いかさまに思ほしめせか」について検討する。この表現は、『万葉集』中、類似例も含めて、人麻呂の「近江荒都歌」以外はすべて挽歌において用いられている。

○： やすみし 我が大君 高照らす 日の皇子 いかさまに
思ほしめせか 何方尔 所念食可 神風の 伊勢の国は 沖
つ藻も なみたる波に 。（巻二・一六二）

○： 大船の 思ひ頼みて 天つ水 仰ぎて待つに いかさまに
思ほしめせか 何方尔 御念食可 つれもなき 真弓の岡に
宮柱 太敷きいまし 。（巻二・一六七）

○秋山の したへる妹 なよ竹の とをよる児らは いかさまに
思ひ居れか 何方尔 念居可 桺縄の 長き命を 露こそば
朝に置きて 夕には 消ゆといへ 。（巻二・二二七）

右に挙げた三例は、先行する挽歌作品において用いられたものである。いずれも死者に対して、亡くなったことを客観的視点から

「どのように思ったのか」と推量しつつ、批難するような表現である。

それに対して、「いかにせむ」「いかにせよ」という用例を見てみると、

○潮満たば いかにせむ〈如何將為〉とか 海神の 神が手渡る
海人娘子ども(巻七・一二一六)

という用例が、「いかさまに思ほしめせか」に近い、客観的な視点からの批難を表している。しかしながら、用例のほとんどは、

○相見ずは 恋ひざらましを 妹を見て もとなくのみ 恋ひ
ばいかにせむ〈奈何將為〉(巻四・五八六)

のように自問自答する表現として用いられている。また、当該歌の「我をばもいかにせよとか」は、恋人との別れに際して詠まれた

○衣手に 取りとどこほり 泣く子にも まされる我れを 置き
ていかにせむ〈如何將為〉(巻四・四九二)

という例に近く、独り取り残される自分の悲哀を相手に訴えているのである。同じく死者を批難する表現であっても、「いかさまに思ほしめせか」のような、亡くなってしまったこと自体を責めている表現とは性質が異なる批難である。この二つの表現の違いについては既に平館英子氏が指摘している。平館氏は一六七番の例について「自己の心中での一方的な問いかけのみである」とし、それに対して「日本挽歌」では、「話主はその歎きを妻の心に問いかけ、訴え、なお、その問いが空しい答をしかもたらさない現実を示すことで話主の悲哀感を浮き彫りにしている。」と、述べている。しかしながら、「詰問めいた発想自体は一致している」とした上で、なぜ、人

麻呂の表現が「自己の心中での一方的な問いかけ」であり、当該例が「妻の心に問いかけ」た表現であると判断できるのか筆者には疑問である。一六七番の例ではわかりにくいだが、一六二番では「我が大君」、「一二七番で」をよる見ら」と「詰問」の対象が直前に明示されていることから、「自己の心中での」とは言えないのではないだろうか。「いかさまに思ほしめせか」という表現も死者に対して「詰問」する表現であるという点、また、「空しい答をしかもたらさない」という「話主」の認識では同じであると思われる。異なっているのは「詰問」の内容なのである。

加えて、「我をばもいかにせよとか」が「いかさまに思ほしめせか」と異なるのは、客観的視点からの批難ではなく、その「死」が自分に及ぼす影響を考えている点であり、また、その相違によって示されるのは死者と残された者の親密度であるといえよう。また、「いかにせよ」と命令形になっているのは、亡くなったことが「心そむきて 家離ります」という「妹」の主體的な行動として捉えられていることの反映であり、だからこそ、

○楊こそ 伐れば生えすれ 世の人の 恋に死なむを いかにせ
よ〈伊可尔世余〉とそ(巻十四・三四九一)

と、相手に詰め寄るこの例のように、強く責める気持が現れているのである。

また、「いかにせむ」「いかにせよ」の集中例(当該歌、反歌七九五番除き十四例¹³)のうち、十例までが相聞歌で自分がどうすればいいかということを表わしていることから、「我をばもいかにせよとか」という表現は、村山氏が指摘したような「挽歌的悲哀」の表現

というよりも、「相聞歌」的なくどき文句に近い表現だと考えるべきであろう。

以上、先行研究で指摘されてきた先行作品との類似表現を再検討すると、主體的な行動として描かれる「妹」の死と、その結果、夫が「相聞歌」的な表現で、独り取り残されたことについて相手を責めているという点において違いが見られることが明らかになった。主情部分の表現には、先行する挽歌には見られない、当該歌の特徴が現れているのである。

もつとも、「心そむきて家離ります」に見られる「そむく」、「さかる」といった「死」を死者の主體的な行動に喩える表現は、他の挽歌においても、それぞれ単独で、死を表現する際に用いられている。次は、それらと当該歌の表現との違いについて検討する。

三

まず、『万葉集』中の「そむく」について見ていきたい。用例を次に挙げる。

○…臥やせば 川藻のごとく なびかひの 宜しき君が 朝宮
を 忘れたまふや 夕宮を 背き¹⁴〈背〉たまふや うつそみと
思ひし時に …(巻二・一九六)

○…頼めりし 児らにはあれど 世の中を 背き¹⁵〈背〉し得ね
ば かぎろひの もゆる荒野に 白たへの 天領巾隠り …

(巻二・二二〇)

○…頼めりし 妹にはあれど 世の中を 背き¹⁶〈背〉し得ねば

かぎろひの もゆる荒野に 白たへの 天領巾隠り …(巻二・二二三、或本歌)

これが、集中の「そむく」の全用例であり、しかも、すべて人麻呂の挽歌の用例であり、この表現が特異なものであったことがわかる。これについては一九六番の「明日香皇女殯宮挽歌」の用例について、すでに『万葉集新考』¹⁴や、小島憲之氏¹⁵がその発想の源を漢籍に求めている。

挽歌という同様の主題を持った歌において、特異な「そむく」を死の表現として用いているということは、先行研究でも指摘されているように人麻呂歌を意識していたとみて間違いないであろう。しかし、一九六番における「背く」は、小島氏が「この『忘れたまふ』や『背きたまふ』は、朝夕の御機嫌奉伺をした御殿をはなれる意であり、全体として皇女の薨去を示す句である。」と述べているように¹⁶「はなれる」ことを意味する「背く」である。一方、当該歌において「はなれる」意を示しているのは「家離ります」である。また、二二〇、二二三番の泣血哀慟歌の例では、「世の中を背きし得ねば」と、「世の中の道理」というものを導入し、それに「背く」ことが出来ないで、妹は亡くなってしまったのだと詠まれている。つまり、「泣血哀慟歌」では「死」は避けられない運命として表現されているのである。ところが、当該歌では「妹」が「語らひし心」に「そむき」、その結果「家離ります」という状態にあるのであり、「死」が「妹」の意志であることが「そむく」によって表現されている。これは「泣血哀慟歌」の死の描き方と大きく異なる点である。一九六番の「背く」については、死者の主體的

な行動を表わしているといえるであろうが、当該歌の「そむく」はその「背く」をそのまま用いたのではなく、「心」と熟合させるという新しい創意が加えられたことにより、「妹」の心情を表わすことばとして機能しているのである。

一方、「さかる」、また同様の意味を持つ「はなる」については、集中例のうち、およそ半分が挽歌において見られ、死者の行動を表現するための常套句であつたといえる。

やはり、当該歌において、死者の主体性を表現する際の独自の点は「心そむきて」という「妹」の心情表現にある。それに「さかる」という移動を表現する挽歌の常套句が組み合わされたことによつて、一層「死」が妹の自ら選んだ状態であることが強調されているのである。

また、先行する「亡妻挽歌」である「泣血哀慟歌」の死の表現に相当する部分についても同様のことがいえる。

○… 渡る日の 暮れぬるがごと 照る月の 雲隠るごと 沖つ藻の なびきし妹は もみち葉の 過ぎて去にき〈過伊去〉と 玉梓の 使ひの言へば … (巻二・二〇七)

○… 世の中を 背きし得ねば かぎろひの もゆる荒野に 白たへの 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちいまして〈朝立伊麻之弓〉入日なす 隠りにしかば〈隠去之鹿齒〉 … (巻二・二一〇)

○… 世の中を 背きし得ねば かぎろひの もゆる荒野に 白たへの 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちい行きて〈朝立伊行而〉入日なす 隠りにしかば〈隠西加婆〉 … (巻二・二一一)

三、或本歌

二〇七番では「過ぎて去にき」、二二〇番では「朝立ちいまして」「隠りにしかば」、二二三番では「朝立ちい行きて」のように、「泣血哀慟歌」においても主體的な行動によつて「死」が描かれているといえるだろう。しかしながら、これらの「死」の表現には、当該歌のような心情に着目した表現は見られない。

また、前述したように「心そむきて」は集中唯一の表現ではあるが、挽歌において類似する表現が見られる。例えば、日並皇子の舍人勳傷歌の一首には、「心違ひぬ」という表現がある。

○天地と 共に終へむと 思ひつつ 仕へ奉りし 心違ひぬ〈情違奴〉(巻二・一七六)

これは、永遠にお仕えしようという将来の心積もりが、皇子の死によつて果たせなかつたことを嘆いているものである。また、「亡妻挽歌」においても、

○… 新代に 共にあらむと 玉の緒の 絶えじい妹と 結びてし ことは果たさず 思へりし 心は遂げず〈心者不遂〉 白たへの 手本を別れ にきびにし 家ゆも出でて … (巻三・四八一)

○天地の 神はなかれや 愛しき 我が妻離る 光る神 鳴りはた娘子 携はり 共にあらむと 思ひしに 心違ひぬ〈情違奴〉言はむすべ せむすべ知らに … (巻十九・四二三)

のように、共に添い遂げようする思いが果たせなかつたことを嘆く表現が見られる。これら「心違ひぬ」「心は遂げず」の用例はいずれも、予想していた将来との食い違いを表わすものである。また、

同じ死別に関する感慨であっても、遺された者自身の感慨であり、死者の心情を表現した「心そむきて」とは性質を異にする。

以上のことから、当該歌における「死」の表現は他の挽歌作品の「死」の表現とも、類似する表現とも全く異なる、憶良の創り出した新しい死別の描き方といえるのである。

四

では、そういった「死」の表現の核となっている「心そむきて」という心情表現は、人麻呂が漢籍から発想を得て生み出した「背く」を転用しただけのものなのであろうか。

井村哲夫氏は、憶良作「哀世間難住歌」(巻五・八〇四、八〇五)、「貧窮問答歌」(巻五・八九二、八九三)において、「倭歌のこ」とばと文脈とを、思想や論理を担うに十分たるものとするために、「仏典語や漢語」を「倭語・倭文脈」へ「翻案」するという「工夫」が行われていることを指摘している。「心そむきて」についてもそのような可能性はないのであろうか。当該歌は仮名書き例であるが、人麻呂の用例(巻二・一九六、二一〇、二二三)に「背」という字が用いられていることから、漢籍において「背」+「心」、あるいは「情」という表現について調べてみた。ところが、管見に入ったのは、以下の二例であった。

○仲尼曰 葉都大而國小 民有背心(『韓非子』難三第三八)
○且夫要功之倫 陵肆之類 莫不背情 任計 味利忘親 縱懷慈孝之愛 或慮傾身之禍 (『三国志』魏書 卷二四/高柔)

どちらの用例も、当該歌の主題とは異なる、政治的な記事の用例である。

一方、『日本書紀』に次のような

○專信其言 不憂国難 乖背吾心 縱肆暴虐 由是見逐(『日本書紀』卷第十九、欽明天皇五年二月)

「乖背吾心」という表現があることから「乖」という字についても「心」と結びつく可能性が考えられる。また、その「乖」という字は、次の訓点資料等から、「ソムク」と訓まれていたことが推測できる。

○西大寺本『金光明最勝王經』古点「寒暑調和二シテ、時序ヲ乖カジ」

○石山寺本『法華義疏』長保点「田獵ハ慈悲ニ乖傷ラル」

○『金光明最勝王經音義』(7ウ)「乖曾牟久」

そこで、「乖」についても同様に漢籍について調べたところ、『玉台新詠』卷二、賈玄「苦相篇豫章行」において、次のような句が見出された。

情合同雲漢 葵藿仰陽春 心乖甚水火 百惡集其身

芳賀紀雄氏が指摘されているように、¹⁸⁾「泣血哀慟歌」の典故と考えられる詩があるなど万葉集への影響が考えられている『玉台新詠』に「心乖」という表現があるということは注目すべきことである。また、「沈痾自哀文」に「遊仙窟曰 九泉下人 一錢不直」とあるなど、枚挙に暇がないほど、憶良が影響を受けていたことが明らか漢籍である『遊仙窟』の中にも、

得意似鴛鴦 乖情若故越 不向君邊盡 更知何處歇

と「乖情」という表現が見出される。さらに、『藝文類聚』(卷二九、別上)の梁宗史「當作夫」詩にも

別酒正參差乖情將陸離

と、同様の表現が見られる。

また、芳賀氏は、憶良が『遊仙窟』の詩の表現

十娘見詩 竝不肯讀 卽欲燒卻 僕卽詠曰 未必由詩得 將詩故表伶 聞渠擲入火 定是欲相燃

から発想を得て、

○：……ことは 死ななと思へど 五月蠅なす 騒く子どもを

打棄てては 死には知らず 見つつあれば 心は燃えぬ へ心波

母延農》：(卷五・八九七)

に見える「もゆ」という表現を「情意語」として転用したことを指摘している。「心そむきて」の場合も「そむく」が「情意語」として用いられており、「乖情」という表現についても同様に転用された可能性が考えられる。

また、『玉台新詠』の「心乖」は「情合」の、『遊仙窟』の「乖情」は「得意」という、男女間において思いが通じ合うことの対句として用いられている。そのような表現は「二人並び居語らひし」という思いが通じ合っていた状態に対して、その「心」に「そむく」と表現されている当該歌に類似しているともいえる。

また、『遊仙窟』には、

下官 拭淚而言曰 所恨別易會難 去留乖隔

という表現が見られる。この部分の「去留」については、卷五、八〇六番に前置きされた、大伴旅人作説が有力な書簡文に、「唯羨

去留無恙」という記述があり、『遊仙窟』のこの部分の記述を踏まえているといわれ、また、八七一番の序に「嗟此別易 歎彼會難」とある表現についても、同じ箇所に掲げる表現であることが『万葉代匠記』(精選本)で指摘されている。それならば、下に続く「乖隔」という語句についても旅人や、憶良には認知されていたであろう。つまり「乖」が人間関係における隔たりを意味する字であることが認識されていたということでもある。

そのような「乖」という字の用例は漢籍において多く見られる。その一部を次にあげる。

① 皇天崩兮后土頽 身爲帝兮命夭摧 死生路異兮從此乖 奈我

梵獨兮中心哀(『全漢詩』第三卷、唐姬歌一首)

② 君發兮引邁 去我兮日乖 恨無兮羽翼 高飛兮相追(『玉台新

詠』卷一、徐淑「秦嘉妻答詩一首」)

③ 自傷命不遇 良辰永乖別 已爾可奈何 譬如紉素裂(『玉台新

詠』卷二、賈玄「朝辭篇怨歌行」)

④ 遊宦久不歸 山川脩且闊 形影參商乖 音息曠不達(『玉台新

詠』卷三、陸機「東南有思婦」)

⑤ 守長夜兮思君 魂一夕兮九乖 悵延佇兮仰視 星月隨兮天迴

(『藝文類聚』卷三四、哀傷、魏文帝「寡婦詩」)

これらはすべて、男女間の別れに関して用いられている「乖」である。①は、「皇天崩」とあるように、皇帝の死に際して后が詠んだ歌であり、死別を「乖」で表現している。また、⑤は「寡婦詩」であり、やはり死別を「九乖」と表現している。このような死別を示している例は次のように、「哀傷」や「誄」においても見られる。

○將乖不別 欲以遣離情（『文選』卷二三、哀傷、任彥昇「出郡傳舍哭范僕射一首」）

○龜筮既襲 埏隧既開 痛矣楊子 與世長乖（『文選』卷五六、潘安仁「楊仲武誄一首」）

これらの漢籍に散見する「乖」という字の用法、熟語について、「心そむきて」の直接の出典とするには更に厳密な分析が必要であると思われる。しかしながら、「そむく」が心情表現として用いられていること、また、夫婦間の死別を主題とした当該歌において、その別れを表現するために「そむく」が用いられているという点から「心そむきて」という特異な表現の典拠として、人麻呂の「背く」とは異なる「乖」という字の用法があるという可能性を考えるべきであろう。

小川靖彦氏は、「家ならばかたちはあらむを」という「形」の喪失として死を捉えることについて漢籍との関連を見て、「日本挽歌に見られる死の意識は、こうした漢詩文における死の把握に影響された、極めて新しい死の捉え方であったのではあるまいか。」と述べて、従来「日本の挽歌の伝統の意識的継承」という面からのみ論じられることが多かったことを批判している。この指摘は、本節の「乖」字についての検討によって、より一層明らかになったのではないかと思われる。

五

さて、この「心そむきて」という『万葉集』中例のない特異な表現について、先行研究ではそむいた対象である「語らひし心」の内容と併せて解釈しようとする傾向がある。その中でも、前置漢詩文と対応させて、解釈しようとする説が新旧の注釈書、論文等に多く見られる。つまり、前置漢詩文中の「偕老違於要期 独飛生於半路」という部分の「偕老」が、「語らひし心」の内容を示しているという説である。『万葉代匠記』（精撰本）では、「心そむきては、偕老同穴の詞に背くなり」とある他、『万葉集古義』では「許々呂曾牟企弓は、預ていつまでも、共に匹ひ居む、と相語ひし心を背きて、といふなり、上の詞の序文に、何圖偕老違於要期。云云とある意なり。」とやはり、対応させて解釈している。

また、一方で前置漢詩文と関連させずに、「日本挽歌」の表現のみで解釈しようとする説も存在する。『万葉集総釈』では単に「情愛深かった心に反して」とあり、金子『万葉集評釈』では、「これまで夫婦中よく、二人竝んで居て語らつた情に背いて」と、「には鳥のふたり並び居 語らひし」という部分の表現内容に即した解釈に留めている。

芳賀紀雄氏は、前置漢詩文との対応について、同じ憶良の作品である「令反感情歌」（巻五・八〇〇、八〇一）、「思子等歌」（巻五・八〇二、八〇三）、「哀世間難住歌」（巻五・八〇四、八〇五）のように漢文が「並序」として「歌の序として併せられていた」作品と

「日本挽歌」は「位相を異にする」と述べている。つまり、そのような形式を備えていない「日本挽歌」は「詩文と歌とがおのおの完結性を帯び、形式上はいわば並立の体裁」と見るべきだとしている。そして、「厳密にいえば、その対応は『にほ鳥のふたり並び居 語らひし 心そむきて』と『偕老違要期』の類似があげられる」にすぎず、「他方を意識しての借辞」と考えなくても、それぞれの系統（漢籍と日本の挽歌）の中で「たやすく想起」できる表現であつたと主張し、これらの理由から、前置漢詩文と「日本挽歌」の表現を安易に対応させて考えることを批判している。この芳賀氏の指摘は注目すべきであろう。さらに私見を加えるならば、その相違点にも注目すべきであると思われる。芳賀氏は「いづれも、妻に先立たれた痛恨を訴えることに差異」はないと述べているが、前置漢詩文の「独飛生於半路」という表現は、遺された者、つまり、夫を主体とした表現であり、一方、「日本挽歌」における「心そむきて家離ります」は「妹」を主体とした表現である。このことから、前置漢詩文と、「日本挽歌」は単に同じ内容を表現しようとしているのではなく、芳賀氏が述べているように「おのおの創作意図を異にし」た上で、妻の死という主題を表わそうとしていたとみるべきであろう。よって、そういった表現の違いがあつたという前提で、まずは「日本挽歌」の表現の中で「語らひし心」を解釈すべきだと思われる。

鉄野昌弘氏は「語らひし心」の内容を「日本挽歌」全体の解釈と関連させて、

「二人並び居語ら」つたのが、奈良の家であつたことは言う

までもない。なおかつ、それが「家ならばかたちはあらむを」という仮定から、逆接で続いているのであるならば、「語らひし心」とは、「偕老同穴の夫婦の契り」（『全注』）といった抽象的な事柄ではなく、妻が奈良の家に留まって、帰りを待つという約束なのではなかったか。²⁴（傍線 筆者）

と述べて、「語らひし」場所を限定した上で、その内容を具体的な「約束」としている。ところが、「語る」「語らふ」の『万葉集』中の例を見てみると、

○天雲の 向伏す国の ものふと 言はるる人は 天皇の 神の御門に 外の重に 立ち候ひ 内の重に 仕へ奉りて 玉葛いや遠長く 祖の名も 継ぎ行くものと 母父に 妻に子どもに語らひへ語て 立ちにし日より ……（巻三・四四三）

のように、語る内容が特殊な場合は、その内容（波線部分）が明示されることが多いことがわかる。そのような例のうち、

○うちひさす 宮へ上ると たらちしや 母が手離れ 常知らぬ 国の奥かを 百重山 越えて過ぎ行き いつしかも 都を見むと思ひつつ 語らひへ迦多良比居れど ……（巻五・八八六）

○神代より 言ひ伝て来らく そらみつ 大和の国は 皇神の厳しき国 言霊の 幸はふ国と 語りへ加多利 継ぎ 言ひ継がひけり ……（巻五・八九四）

右の二例は、憶良の用例であり、

○… 夕星の 夕になれば いざ寝よと 手を携はり 父母も うへはなさがり さきくさの 中にを寝むと 愛しくしが語

らへ〈可多良倍〉ば … (巻五・九〇四)

は、おそらく憶良作であろうと言われている歌の用例である。八八六番では、「いつしかも都を見む」と、仲間と語り合った内容が、八九四番では「大和の国」を褒め称える内容が、九〇四番では、息子が語った内容が、具体的に明示されている。

また、鉄野氏が可能性として提示されたような「約束」という意味を持つ用例は次の二例であると思われる。

○… あをによし 奈良山過ぎて 泉川 清き河原に 馬留め
別れし時に ま幸くて 我帰り来む 平けく 斎ひて待てと
語らひ〈可多良比〉て 来し日の極み … (巻十七・三九五七)

○… うち嘆き 語り〈可多里〉けまきは とこしへに かくし
もあらめや 天地の 神言寄せて 春花の 盛りもあらむと
待たしけむ 時の盛りそ … (巻十八・四一〇六)

しかしながら、この二例には約束の内容が歌の表現として明示されている(波線部分)。三九五七番では、自分の無事な帰還について語ったこと、四一〇六番においては、将来の出世を語りあったことが描かれている。つまり、内容が将来についてのものであることが明示されていることによって「約束」という意味が生じるのである。当該歌のように、語った内容が明示されていない場合に果たして約束という意味を認めることができるのであろうか。そこで、次に内容が明示されていない用例についても検討する。まずは、

○土やも 空しくあるべき 万代に 語り〈語〉継ぐべき 名は
立てずして (巻六・九七八)

のように、「語る」対象が「名」、つまり、「名声」である場合はその内容が明示されていない。また、

○… 見る人の 語り〈語〉にすれば 聞く人の 見まく欲りする
御食向かふ 味経の宮は 見れど飽かぬかも (巻六・一〇六二)

のように、「味経の宮」という、場所を讚美する場合も同様である。また、

○… 葦屋の 菟原処女の 奥つ城を 我が立ち見れば 永き世
の 語り〈語〉にしつつ 後人の 偲ひにせむと 玉梓の 道
の 辺近く 岩構へ 作れる塚を … (巻九・一八〇一)

のように、語る内容が伝説、伝承に関わる場合もある。この歌では、語る内容が具体的に表現されてはいないものの「葦屋の菟原処女」の伝説に関わるものであるから、その内容は説明されずとも了承されているのである。

以上の用例から、語る内容が、了承された当然のことである場合は具体的に明示されない場合が多いことがわかった。さらに、夫婦や恋人の間で「語る」「語らふ」が用いられた場合も、そのような場合と同様に扱われていたようである。

○人言を 繁みと君を 鶉鳴く 人の古家に 語らひ〈相語〉て
遣りつ (巻十一・二七九九)

○百足らず 山田の道を 波雲の 愛し妻と 語らは〈語〉ず
別れし来れば … (巻十三・三二七六)

○… さ丹塗りの 小舟もがも 玉巻きの 小梶もがも 漕ぎ渡
りつつも 語らふ〈相語〉妻を (巻十三・三二九九)

○にほ鳥の 息長川は 絶えぬとも 君に語ら へ可多良 〆 言
尽きめやも (巻二十・四四五八)

これらのように、男女間で「語る」「語らふ」が用いられた場合は、

○我が恋ひし ことも語らひ へ語 慰めむ 君が使ひを 待ち
やかねてむ (巻十一・二五四三)

といった明示されている例のように相手に対する愛情や、恋情であることは明らかであり、明示される必然性がなかったのである。

また、語った内容よりも、「語る」「語らふ」こと自体が重要な意味を持つ場合もその内容は示されていない。

○： 大君の 敷きます国は 都をも ここも同じと 心には
思ふものから 語り へ語 け 見放くる人目 乏しみと 思

ひし繁し： (巻十九・四一五四)

右の歌は、「語り合い、慰め合うべき人が少ない」(『新日本古典文学全集』参照)ことを嘆いているのであり、「語る」という行為自体が意味のあるものとして表現されている。また、三二七六番についても「語らはず」に別れたことを嘆いているのであり、三二九九番の場合も「語らふ妻を」と、語り合いたい対象として妻を求めているのであり、語り合うこと自体が、男女間において重要な行為として認識されていたといえよう。

以上の用例から、男女間で「語る」「語らふ」が用いられた場合、具体的な話の内容ではなく、それ自体が重要な意味を持つ、愛情の確認ともいえるべき行為として表現されていることが明らかになった。また、憶良の他の用例を見ても、八八六番、八九四番、九〇四番(憶良作か)のように、特殊な内容であった場合は具体的に叙述

されていることから、当該歌においても鉄野氏の主張するような特殊な内容であれば、もつと直接的に表現されたと考えられる。よつて、当該例の「語らひし心」に具体的な「約束」という意味までを含めて解釈することはできないと思われる。また、その内容よりも「二人並び居語ら」つたこと自体が重要なのであり、注目すべきは、それに「妹」がそむいてしまった事である。つまり、夫婦の仲を象徴する行為の中で育まれた「心」に「妹」はそむいたといえるのである。夫婦二人で語らつた中には「偕老」といったことも含まれていたかもしれない。しかし、前述したように前置漢詩文と、「日本挽歌」はそれぞれ独自の表現内容を持った作品として捉えるべきであり、『万葉代匠記』(精撰本)や『万葉集古義』のように内容を「偕老」に限定して解釈すべきではないだろう。

以上、述べてきたような夫婦にとつて重要な「語らひし心」に「そむいて」しまった「妹」の行動は「恨めしき」と表現され、夫の怨嗟の対象となっている。次は、その表現について考えてみたい。

六

岡内弘子氏は「恨めし」の『万葉集』中の例を検討した上で、「相手(対象)に対して好意を抱くゆえに、相手を愛する心が強いゆえに、生じる感情である」としている²⁵。しかしながら、岡内氏の言われる「対象」とは、「恨めし」を直接投げかけられている「対象」を指しているとは思われない。そこで、本稿でも再度「恨め

し」の集中例を検討してみたい。

⑥… こと放けば 国に放けなむ こと放けば 家に放けなむ
天地の 神し恨めし 恨之 草枕 この旅の日に 妻放くべ
しや (巻十三・三三四六)

⑦耳無の 池し恨めし 恨之 我妹子が 来つつ潜かば 水は
涸れなむ (巻十六・三七八八)

右にあげた二例は挽歌である。三三四六番において「恨めし」の対象となっているのは「神」、三七八八番においては死者が入水した「池」となっていて、それは死者を奪った対象として捉えられている。挽歌において「恨めし」の対象になるのは、死の原因を作ったものであるといえよう。次に、挽歌以外の例についても検討してみる。

⑧… 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りてそしのふ 青
きをば 置きてそ嘆く そこし恨めし 恨之 秋山そ我は
(巻一・十六)

⑨春日野に 粟時けりせば 鹿待ちに 繼ぎて行かましを 社し
恨めし 怨焉 (巻三・四〇五)

⑩我妹子を 相知らしめし 人をこそ 恋の増されば 恨めし
恨之 み思へ (巻四・四九四)

⑪ひさかたの 天つしるしと 水無し川 隔てて置きし 神代し
恨めし 恨之 (巻十・二〇〇七)

⑫恨めしく 字良賣之久 君はもあるか やどの梅の 散り過
ぐるまで 見しめずありける (巻二十・四四九六)

挽歌以外の用例の中で、⑧はまだ紅葉していない葉を残してきた

こと、⑨では「鹿待ち」を妨げる「社」に対して、⑩は恋しさ募つてくると「我妹子を相知らしめし人」さえも「恨めし」くなつてしまうことが詠まれている。⑪は二人の隔てとなる川を置いた「神代」に対して、⑫では、梅の花を「散り過ぐる」まで見せてくれなかった「人」に対して「恨めし」と詠まれている。

これらの例を検討すると、ある欲求、愛情が満足できないとき、それを阻むもの、または、阻む行為に対して抱く感情が「恨めし」であるといえる。当該歌の場合、自分の愛情を阻んでしまった対象が、同時に、愛情の対象でもあることが他の用例と大きく異なる点である。他の挽歌の用例では対象は死者本人ではなかった。それに対して当該歌では「妹」という死者本人に「恨めし」という遺された者の感情が直接向けられているのである。つまり、当該歌において、夫の愛情を阻むものは「妹」自身の行動なのである。主体的な「死」の表現が「恨めし」の用法にも現れているといえるだろう。

岡内氏は「当面の憶良の場合も、妻をいとしむ情の非常に強いことが窺われる。」²⁶とも述べているが、それは二次的に言えることではあるが、「恨めし」の説明としてはいささか言葉足らずであろう。「恨めし」の対象は自分に苦しみを与えるものであり、その苦しみとは、何かに対する愛着がある上での苦しみである。

また、「恨めし」という感情を抱く者には現在の状況に反する、自身の願望が同時に想起されていることも指摘できる。それは、明示されている場合(⑥⑦⑧⑨)もあるし、そうでない場合(⑩⑪⑫)もあるが、当該歌では「家ならばかたちはあらむを」が「心そむきて家離ります」という現実と反する仮想として提示されている

る。この部分については、『万葉集疑問』で「葬りやらずして家に置くものならば、たとひ死ても、形はそのまゝあらんものを也」と述べられて以来、葬らずに家に留めておいたならば遺体だけでも残して置けたらうにという解釈が多く行われてきた。一方、伊藤博氏は『時代別国語大辞典・上代編』に「カタが、単なる物の外形を表わすのに対し、カタチは人間の姿や容貌に対して用いられることが多い。」とあるのを踏まえて、憶良作かと言われている、

○： 立ちあざり 我乞ひ禱めど しましくも 良けくはなしに
やくやくに かたちへ可多知 つくほり 朝な朝な 言ふこと

止み たまきはる 命絶えぬれ …… (巻五・九〇四)

について、古日は「かたち」が変化して「言ふこと止み」という段階を経て、「命」絶えてしまったのであり、「かたち」は憶良にとつて「命を持ったしやんと物をいうことのできる人間の姿」であると述べている。そして、当該歌の「かたち」についても、「屍体」(『万葉集古義』)「木偶」(『万葉代匠記』(精撰本))などではないとしている。加えて「家」を「奈良の家」であるとして、「奈良の家にそのまゝいたら死ななくてすんだであらうに」と解釈している。

以来、この解釈は支持され、現行の注釈書の多くが伊藤説に従っている。本稿においても、「家ならばかたちはあらむを」は、「恨めし」という表現によって導きだされた、「妹」が亡くなった現実に反する状態を仮想した表現であることから、「夫婦が共に暮らした生活の場の場にいたならば、姿かたちもそのままであるだろうに」といったように解釈すべきだと考える。

むすび

以上、「心そむきて」を中心に「日本挽歌」長歌の主情部分の表現について、先行する挽歌作品と比較しつつ検討してきた。ここでもう一度、当該歌の新しい表現や、語句の用い方について確認する。

第一点は、「我をばもいかにせよとか」や、「心そむきて」という言葉に象徴される主體的に捉えられた「妹」の死の表現である。特に、「心そむきて」という「妹」の心情と、死の敬避表現である「家離りいます」を組み合わせて、死者の意志を強調していることが新しい「死」の描き方であるといえるだろう。

第二点は、「心そむきて」という表現は、人麻呂の「背く」の用例を意識しながらも、一方で憶良独自の発想があったのではないかということである。人麻呂の用例の典拠とは異なる、「心乖」「乖情」といった男女間の心情を表わす表現、あるいは人との別れを示す「乖」という字の漢籍における用法が、「そむく」という言葉が心情表現に用いられるにあたって影響があった可能性が考えられる。

第三点は、「死」が「妹」の主體的な行動として捉えられていることによつて、死者への批難の表現が変化していることである。まず、通常、自分の愛情などを阻むものに対して用いられる「恨めし」が、愛情の対象である「妹」に対して直接用いられている。さらに、相聞歌的なくどき文句である「我をばもいかにせよとか」

で、独り取り残されたことについて死者を責めていることである。亡くなったこと自体を責めていた「いかさまに思ほしめせか」という挽歌の常套句とはその点において異なるのである。このように、主情部分には「妹」の主體的な死を表現するために、それに対応するいくつかの表現が意図的に用いられているのである。

以上のような点から、主情部分は従来言われてきたような先行する作品の踏襲ではなく、「亡妻挽歌」という主題に対する憶良の独自の創意が多く見られる部分であることが確認できた。特に、本稿で注目した「心そむきて」のように、死者である「妹」の心情に着目した表現は、当該歌冒頭に「泣く子なす 慕ひ来まして」とあり、また、第二反歌（七九六番）においても、「慕ひ来し 妹が心」について詠まれている。こういった表現は、自分自身の妻への思いや嘆きが述べられるのみで、関心が妻の心情に向けられることがない「泣血哀慟歌」とは対照的である。このような「亡妻挽歌」における新しい視点導入の中心となっていたのが、死を心情面において捉えた「心そむきて」という『万葉集』中唯一の表現であったのである。

※資料中の引用は次の通り

- 『万葉集』『日本書紀』——新編日本古典文学全集（小学館）
『文選』——全釈漢文大系（集英社）
『玉台新詠』『韓非子』——新釈漢文大系（明治書院）
『藝文類聚』——中華書局出版
『遊仙窟』——醍醐寺本

漢詩——丁福保編『全漢三国晋南北朝詩』

※『万葉集』『日本書紀』歌謡の引用の際には、必要部分のみ原表記をへゝ内に提示した。

※引用の漢文の読点、返り点は省略した。

※万葉集の注釈書の引用に際しては著者名を省いた。但し、同じ書名の場合には著者の姓を書名の前に付した。

- 1 井村哲夫『万葉集全注』巻五において諸説が整理されている。
- 2 鉄野昌弘『日本挽歌』『セミナー万葉の歌人と作品』第五巻、二〇〇〇年九月、和泉書院
- 3 大浜巖比古『巻五について考へる』『万葉学論叢』一九六六年七月、澤瀉博士喜寿記念論文集刊行会
- 4 伊藤博『学士の歌——憶良文学の問題』『万葉集の歌人と作品』下、一九七五年、塙書房（初出一九六九年三月）
- 5 小島憲之『山上憶良の述作』『上代日本文学与中国文学』中、一九六四年三月、塙書房
- 村山出『日本挽歌——悼亡詩文の構成の面から——』『山上憶良の研究』一九七六年、桜楓社（初出一九六五年十月）、芳賀紀雄『憶良の挽歌詩』『女子大国文』八七、一九七八年五月など
- 6 五味保義『憶良、旅人の位地』『万葉集作家の系列』一九四二年九月、弘文堂書房
- 7 青木生子『亡妻挽歌の系譜——その創作的虚構性——』『万葉挽歌論』一九八四年、塙書房（初出一九七一年一月）

- 8 村山出、注5論文
- 9 岡内弘子「山上憶良『亡妻哀悼歌』」「群馬県立女子大学紀要」五、一九八五年三月
- 10 小島憲之、注5論文
- 11 村山出、注5論文
- 12 平詔英子「日本挽歌・反歌五首」「万葉歌の主題と意匠」一九八八年、塙書房（初出一九七三年十一月）
- 13 卷四・四九二、五八六、六三二、卷七・二二一六、一三三四、卷十一・二六五〇、二七三八、卷十三・三二四〇、卷十四・三四一八、三四九一、卷十五・三七一二、三七四六、卷十七・三九二八、卷十八・四〇四六（傍線||相聞歌）
- 14 井上『万葉集新考』は『文選』巻第五八、宋文皇帝元皇后哀策文「南晋國門 北首山園」を指摘。
- 15 小島憲之「万葉集と中国文学の交流」（『上代日本文学与中国文学』中、一九六四年三月、塙書房）は、宋謝莊、黄門侍郎劉琨之誄「過建春兮背闕庭 歷承明兮去城章」（『藝文類聚』四八、黄門侍郎）を指摘。
- 16 小島憲之、注15論文
- 17 卷二・一五〇（2例）、一六一（2例）、二二一、卷三・四七一、卷五・八八六、卷七・一一六一、一二〇二、卷八・一六二九、卷十一・二三六八、卷十三・三三四七、卷十四・三四二〇、三四八〇、卷十五、三五七八、三六〇〇、三六〇一、三六八八、三六九一（2例）、卷十七・四〇〇八（2例）、卷十八・四一〇六、卷十九・四一八九、四二二一、四二三六、卷二十・
- 18 四三三八（2例）、四三九八、四四三二（傍線||挽歌）
- 19 井村哲夫「憶良における漢文・序・歌の全体をどう把握するか」「憶良・虫麻呂と天平歌壇」一九九七年、翰林書房（初出一九九〇年五月）
- 20 芳賀紀雄「万葉集比較文学事典」（『万葉集事典』一九九三年八月、学燈社）は柿本人麻呂「泣血哀慟歌」の短歌
- 21 〇去年見てし 秋の月夜は 照らせれど 相見し妹は いや年離る（卷二・二二一）が、
- 22 〇去秋三五月 今秋還照房（中略）悲哉人道異 一謝永銷亡（『玉台新詠』卷五、沈約「悼亡」）の、表現に負うものであることを指摘。
- 23 芳賀紀雄「理と情——憶良の相剋」『万葉集研究 第二集』一九七三年四月、塙書房
- 24 小島憲之「遊仙窟の投げた影」『上代日本文学与中国文学』中
- 25 小川靖彦「日本挽歌の反歌五首をめぐる」『稲岡耕二先生還曆記念・日本上代文学論集』一九九〇年四月、塙書房
- 26 芳賀紀雄、注5論文
- 27 鉄野昌弘、注1論文
- 28 岡内弘子、注8論文
- 29 岡内弘子、注8論文
- 30 伊藤博「家と旅」『万葉集の表現と方法』下、塙書房一九七六年（初出一九七三年九月）

（はらだ なおみ・北海道大学大学院博士後期課程）